



Title	生きがい療法 : 病は気から
Author(s)	川俣, 順一
Citation	癌と人. 1997, 24, p. 6-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23911
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

生きがい療法

—病は気から—

川俣順一*

1. 生きがい療法

倉敷市の柴田病院の医師伊丹仁朗先生は、ガンの予防・治療に関して、かねがね「生きがい療法」というものを提唱し、実践しておられます。欧米でも夙に精神の働きと免疫との関係が注目されて研究が進んでいます。後で書きますが、イメージ療法というのも、精神と免疫の関係に基づくのであります。東洋医学でも昔から「気」というものを重視し、わが国でも知らず知らずに気という言葉を使っていました。元気、病気、陽気、陰気、その他、気のせい、とか血の氣と限りありません。伊丹先生は、京都都市のルイ・パストゥール医学研究センター（理事長は京都府立医科大学名誉教授である岸田綱太郎博士）で月1回「生きがい療法」の会を催されています。伊丹先生はこの他いろいろ面白い企画でことに、ガンの予防・治療への挑戦をしておられます。例えば、ガンの患者さん達を大阪難波のグランド花月へつれて行って、喜劇や漫才などで楽しい一時を過ごしてもらい、その前と後の患者さんの血液中のNK（ナチュラル・キラー）細胞の活性を調べると、楽しんだ後の方がその活性が数倍高くなることを観察しておられます。NK細胞はガン細胞を攻撃してこれを殺すという重要な役割を持っている、リンパ球の一つです。

岸田先生もイメージ療法でNK細胞の活性が高くなったり、その他インターフェロン（IFN）を作る能力が高くなることを実証しておられます。イメージ療法というのは、自分でなんでも

良いから楽しいことや好きなことを考えることで、それだけでそのような面白い効果が見られるのです。岸田先生によると、IFNをよく作る人はガンになるケースが少なく、これに反しIFNを作る力の弱い人ではガンになることが多いそうです。IFNを作る能力が高い場合、NK細胞の活性も高いということが観察されていますので、ガンに対する抵抗力も強いといえます。

2. IFNANK療法

このようにNK細胞の活性を高めることは、ガン細胞を攻撃する力を強くするのですが、IFNにもNK細胞の活性を高める作用が知られています。ところが、大量のIFNは、ガン細胞の表面構造をガン細胞特異の状態から変えてNK細胞の攻撃力が及び難くなります。そこで、岸田先生等がこのようなことが無いようにと考えされたのがIFNANK療法と呼ばれる、新しい治療法です。IFNはインターフェロン、NKはNK細胞、Aは促進するといいづれも英語の略語または学術用語から作った新しい言葉です。患者さんはベッドに横になったまま、静脈から外部の空気に触れないように無菌的に血液を機械にとりつけたチューブの中を体外循環させてNK細胞を多く含む白血球を集め、それに少量のIFNを与えます。そうしますと、NK細胞のガン攻撃力が何倍か高くなります。この方法ではIFNはガン細胞に接触することは無いので、その攻撃は容易なわけです。この治療を受けている間約2時間、患者さんは何の苦痛も

* 大阪大学名誉教授

なく、また、今まで副作用や障害が現れたことはありません。この治療は一定の間隔をおいて数回繰り返すのが普通のようです。このような治療研究は既に100例以上実施されていまして、臨床検査の結果も良い成績が得られています。NK細胞の活性が高くなるという実験結果も得られています。この研究は日本癌学会や外国の学会でも発表されて注目されています。もちろんこの場合でも早期ガン或いは手術後の再発防止に応用する方が結果は良いと思われます。

3. 笑いはガンの予防薬

伊丹先生は最近、私に面白い本を送って下さいました。その本は今年の1月に主婦の友社から出版された、漫談家の南 けんじ師匠が書かれた「破ガン一笑 笑いはガンの予防薬」という本です。南さんは平成4年3月に国立がんセンターで大腸ガンの手術を受けられたそうです。人口肛門も造らず順調に経過していたところ平成6年には大腸ガンが肺に転移し、今度は専ら制ガン剤の治療になったそうです。しかし、南さんは病気の始めから割り切って、くよくよせず時には高座に上がって自分の病気をネタにお客を笑わせ、いうなれば、ガンと共生しながら毎日を明るく過ごしておられるようです。がんセンターで外出の帰りに大きな声でカラオケを歌って帰ったのも、南さんが最初の人です。また周辺の患者さんの様子もよく観察しておられるようで、明るい患者さんの経過は一般に良く、これと反対に、暗く落ち込んでいた人の結果は良くないということも書いておられます。

(以上、南さんの著書から) 生きがい療法のモデルのような人です。また、その本の最終の第6章では、伊丹先生との対談が載っています。これもまた読み応えのある対談記録です。ぜひ一読をおすすめいたします。

4. 病は気から

はじめにも書きましたように、東洋医学では

気というものを大切にしています。病気も気の持ち方でなったり防げたり、治療できたりすると思われます。自分のことと言うのも気が引けますが、私は若い時から「明日は晴なり」と思い、青年時代の寄せ書きにもそう書き残しています。何か困ったようなことが起こっても、負けては居ないでもしろ困難に積極的に立ち向かう術を考える方です。戦時中、中国大陸や南方インドネシアの孤島に陸軍軍医として従軍しました。中国から南方への転戦では、乗っていた輸送船がアメリカの潜水艦に魚雷攻撃を受けて、私は約10時間海上に浮かんでいましたが、どうせ助けられるだろうから頑張らなくてはと、割合落ちついて居たようです。尤も、内心は半ばあきらめていたのかも知れません。

戦後、無事帰国して大阪大学微生物病研究所での研究を再開したのですが、第2室戸台風の後、急に吹田への移転が決まり、移転計画委員長として海外へも見学に行ったりして、結構忙しい毎日を送りました。そうして1967年(昭和42年暮)，新しい研究所建物に移りました。

私は45歳過ぎ頃から毎年1～2回は胃のレントゲン検査を受けていました。1971年10月始め、その検査に基づいて微生物病研究所附属病院で胃の全摘手術をうけました。幸い経過は順調でしたが手術後に起こった癒着性イレウス(腸閉塞)のため1年後に再度開腹しました。その時は癒着を剥離するのにかなり出血しましたので、輸血をして頂きました。当時、C型肝炎ウイルスの検査ができる時代でしたので、或いはその時に感染したのかも知れませんが慢性のC型肝炎になりました。それでも、医療を受けつつ大阪大学の停年の63歳まで無事に勤め、停年の年、昭和56年以来、大阪の泉南の熊取町に東洋医学(鍼、灸)の短期大学を創設することに奔走する毎日でした。昭和60年4月には開學に漕ぎ着け、初代学長として忙しい日々を、片道2時間の通勤でこなしていました。ところが想いも掛けず、平成3年正月早々急に意識が消

失し、そのまま救急病院へかつぎ込まれ、結局それは肝臓が基で脳がやられたことが明らかになりました。国立循環器病センター及び大阪大学医学部附属病院の先生方のご診療も得て、充分な治療もしていただき、その後は国内の学会に出席のため、東京、横浜、新潟、岡山等へも出かけています。その他、家内と国内旅行に出かけたりもしています。また、学生時代に少しばかり習った観世流の謡曲を、たまたま宝塚にお住まいの人間国宝の良い師匠がおられますので、3年ほど前から習ったり、子供の頃から手がけています油絵を描いて、阪大医学部絵画部銀潮会OB展に出品したり、花づくりを楽しんだり、パソコンに向かったりと結構忙しく暮らしています。もちろん、その間には病院へ受診

したり、点滴に通ったり、時には、検査入院もしたりと、治療と仕事と遊びの相住まいというところです。

5. おわりに

論語術而第7の中で、孔子が「楽しんで以て憂いを忘れ、老いの将に至らんとするを知らず」と言っている章があります。2,000年以上前に、孔子はこのように喝破していたのです。

皆さん、病気には正しい知識を持つことは大切ですが、病気にとらわれることなく、ことに、難病には何時、現代医学が新しい、画期的な治療法や予防法を発見するかも知れません。それらを待つためにも、毎日を大切に生き、病気とつきあい、天寿を全うしようではありませんか。

